

図書館の『彼』





特別でも何でもない、平日の午後だった。

休日が土日ではない俺はなんとなく、暇つぶしに図書館に足を運んだ。

平日では友人が捕まりにくいのだ。だから、ただの偶然の出会いだった。

美しい女性だと思った。

少女。と形容するのは憚れた。

清楚な容姿から漂う、妖艶さ。

そう。ひと目で魅了されてしまったのだ。

そのひと時の間、俺は近く結婚も考えていた恋人のこともすっかり忘れていた。

図書館の香りに混じって、女性の香がすぐ横を通り過ぎる。

東の間の交差、その瞬間にくすりと微笑まれた気がした。…自意識過剰な妄想だろう。

いけない。と思いつつ。
俺は彼女を忘れられなかったのだ。

ふらりと何かを引きずられるように俺は
再び図書館に入ってしまった。

この数日。ふと思いついてしまった。

綺麗な黒髪や妖しく輝く紫の眼。
何かを期待させる香の匂い。

自身の恋人の事よりも。考えてしまう。

これは裏切りなのだろう。

であれば、この惹かれる心を捨てなくては
と。そう思いながらもこうして足は休日なの
をいいことに図書館に向かう。

最後に一回。
最後に一回だけ彼女を見て、この未練は終
わりだ。と言いつつ聞かせて。

図書館の一番奥の読書スペースまで来る。

そこにお目当ての人物はいた。



貸し出し期限
厳守!!!

ふん
んん



んんんんん...

貸し出し期限
厳守!!



貸し出し期限
厳守!!!

俺は目を丸くした。

あの女性が図書館の奥で自慰に励んでいた。

百歩譲ってそれはいいとしよう。

清楚。という最初のイメージは崩れ落ちた。

問題は、彼女に男根が生えていることだ。

あまりの光景に、俺の頭は混乱し通しだった。

俺は男に惹かれたのか。

女性の見た目をした男だった。

女ではなかった。騙された気分になった。

認めたくはないが事実だと。

そう、むしろ良かったじゃないか。

あの胸のうずきは気の迷いだ。

俺の心は恋人にある。

だから、その光景をよくよく見た。

その光景から目を離せなかった。



あら
興奮
しま
した
？

ぞくり。と蠱惑的な響きが腰下からした。

いつの間にか彼女、いや彼が俺の足に縋るように跪き、股間を凝視していた。

気付かぬうちに膨らんだソコ。

男の自慰を見て、興奮したのか。

頭を抱えなくなる現実だ。

これは嘘だ。と思わず口にした。

彼は大きな目をこちらに向けて薄く笑う。

淫魔がいるならこういう姿なのだろう。

頭の悪い夢ならばよかったのに。







私の痴態のせい
でしよう
責任を取らせて
いただきますね

彼は慣れた手つきで俺のベルトを緩め、
チャックを下ろし、欲の塊を取り出す。

元気よく飛び出したソレはさっそく彼の
顔に飛びついた。

綺麗な顔は愉快そうに歪む。

いけないことだ。

このような公共の場で。

誰が来るともわからない。

まだ日も明るいというのに。

それも、男同士なのだ。

俺には恋人もいる。

忌諱すべき状況に俺は抗わなくてはなら
ない。

抗わなくてはならないのに。

















俺はカッととなり、彼を突き飛ばすと
急ぎ、チャックを上げ、外まで走る。

図書館を出て、建物が見えなくなるまで
走る。

誰かの家の塀に手をつき、息を整える。

胸の内はぐちゃぐちゃだ。

抵抗が出来なかった。
されるがままだった。

いや、きつと突然のことに俺は動けなかつ
ただけだ。

そう。それだけの話。

俺のせいではない。
あの紛らわしい男のせいだ。

隆起させてしまったのは何かの間違いだ。

家に帰って俺は、恋人へ電話をした。

電話口から聞こえた恋人の声にホッと
した。

そのまま今夜会う約束を取り付ける。

夕飯と一緒にレストランで楽しむ。
そのままホテルに行った。

いつも通りの身体の重ね合い。
幸福感を感じる。

そう。いつも通り。
と、自分に言い聞かせた。

頭の片隅に邪魔なものがこびりついてい
るようであまく集中できない。

恋人も少々困惑しては不器用な心配をし
てくれる。

結ばれれば幸せをくれるだろう恋人。

なのに今日は鞆の底に隠したりリングケー
スを取り出せなかった。



んっ

ああ

あ

っ
ああ

は
あ

ふ

は
あ

は





ねえ？

大丈夫？
何か悩み…？

…ほんと？

…何か
あったら誰
でもいいから
たよりなさいよ

あ…
いや？

だ、大丈夫
続きを…

しよう。と続けようとした口は塞がれた。

今日はもうやめておこう。

恋人の提案で俺達は時間までその部屋でとりとめもない話をした。

図書館での出来事は話せなかった。

じとりとした後ろめたさ。

この素晴らしい恋人に自分の身に起きた出来事を話したくなかった。

見限られたくなかったのだ。

あの図書館で出会った彼に引くどころかより一層、気になってしまっているとは。



あ！
ああ！

貸し出し期限

俺は気付けば再び図書館の奥にまで足を伸ばしていた。

いけない。とわかっているのに。こんなことは許されない。そう思いながら。

『欲』を抑えられない。とはこういうことかと自然にこの場に居合わせた。

自分でもなぜ、こんな風に行動してしまうのか。わからない。

彼は、セックスの真っ最中だった。

産まれて始めてみる、男同士のセックスだった。

見てはいけないものを見る。

その禁忌に触れる感覚は胸が高鳴った。

高鳴ってしまった。

それを自覚してしまった。



ふい

ふい

んんっ

はああ

貸し出し期限

ふい
ふい
ふい

ふい
ふい
ふい

ふい

?













ふうん

んむんごっ

おっ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ





んじゆる...ん.....

んじゅ

代わる代わる男に抱かれる彼を見た。

図書館の奥。目立たないと言ってもそこは公共施設の一角だ。公序良俗に反してる。

だが、だからこそ。俺は目を離せなかった。その背徳的な景色を。

俺には恋人がいる。

結婚も考えている。

これは彼女への裏切りだ。

愛する彼女への。

俺も彼に触れてみたい。

と、そう思ってしまった。







んぐっ

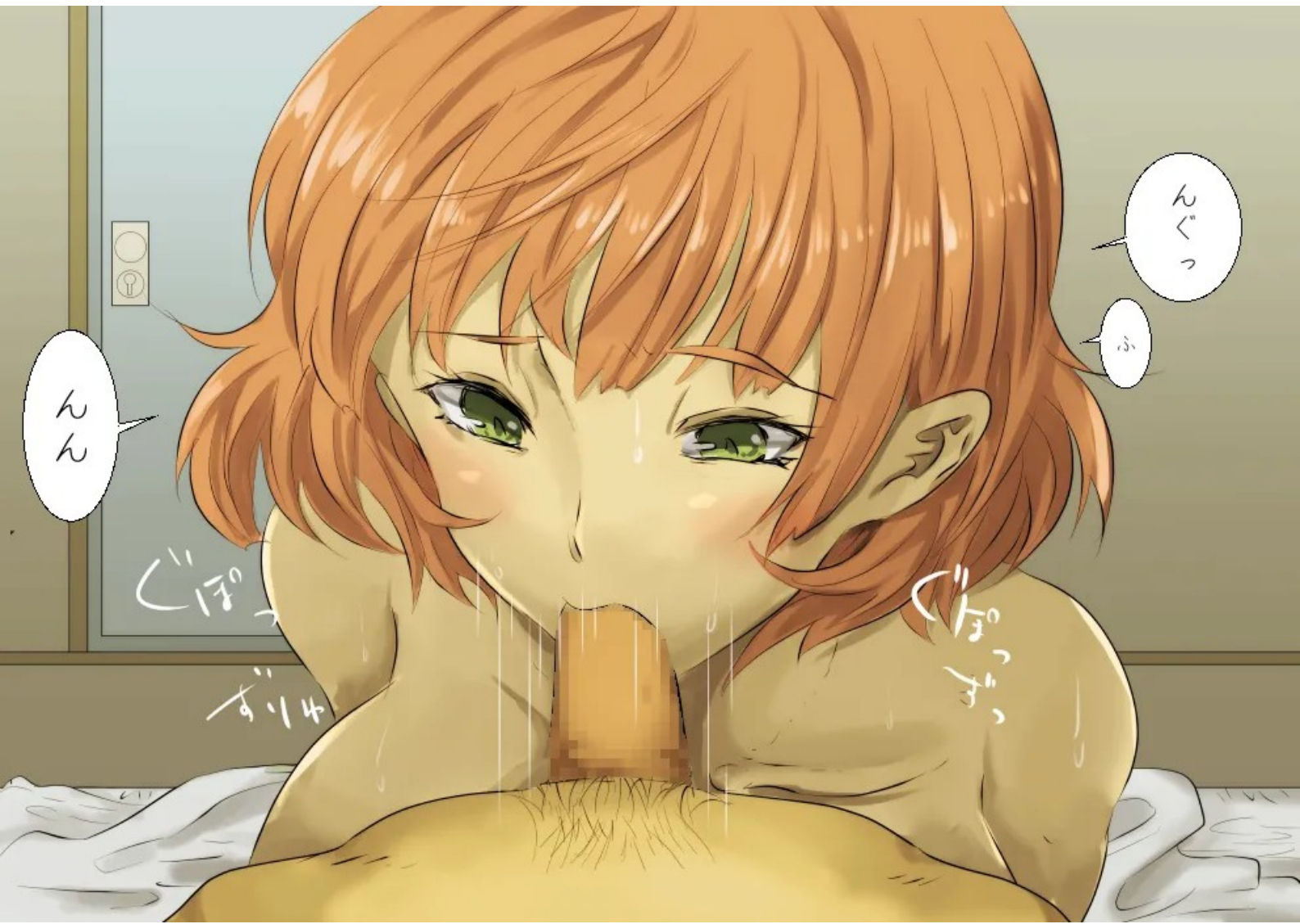
んぷう

んぷう

んぐっ
んぷう

んぐっ
んぷう





ん
ん

んぐっ

ふ

ん
ん
ん

ん
ん
ん





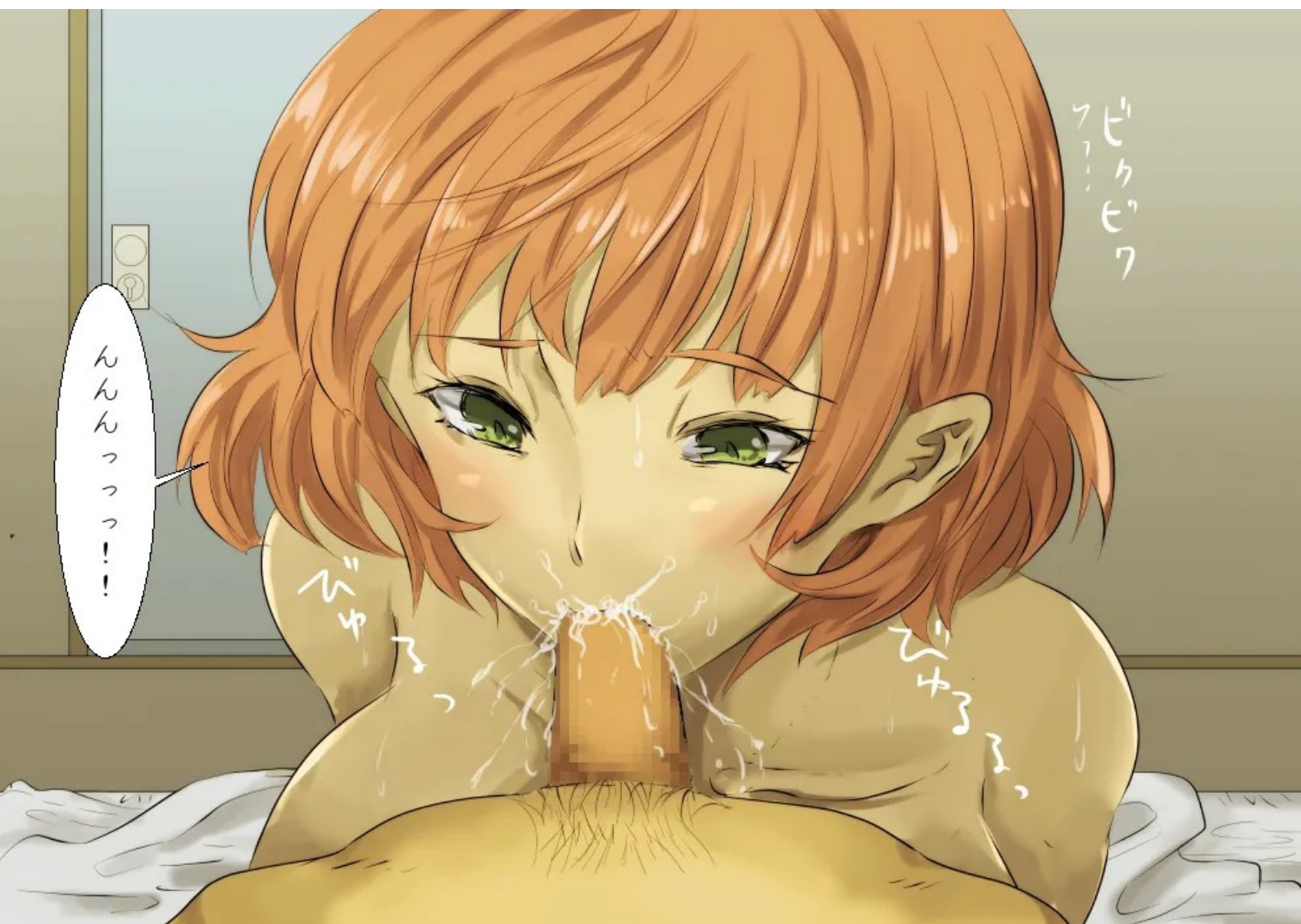
んんっ

んぐ
んんっ

しゅんっ
しゅんっ
しゅんっ

しゅんっ
しゅんっ
しゅんっ

しゅんっ
しゅんっ



んんんっっ!!

びくびく

びくびく

びくびく



昨夜。恋人とのセックスは人生で最も最低なものだった。

フラッシュバックのようにあの図書館での体験がよぎった。

あの歳もわからぬ。名も知らない。なぜ女の格好をするのかも。

どうしてあのような場所で淫婦のような行為に浸っているのかも。

何も知らない。

しかし、自分のことで分かったことがある。

俺は恋人を愛してる。

だが、『彼』の方により興奮してしまうのだ。

ああ、白状しよう。

『男』のことを思い出しながら自分の『女』を抱く。

最低で低俗で醜悪な行為は己の心をひどく満たした。

甘美な背徳感に震える俺は最悪な男だった。







こんにちは

彼は涼しい顔で挨拶をしてきた。

この本の森で何度も俺に自らの痴態を見せつけた男。

いや、見せる気など特になかったのだろう。

そこでまぐわっていたら誰かが見てる。

その程度。

そのくせ、こちらに視線を寄越すのだ。

挑発するように。

誘惑するように。

きっとその罠にかかった間抜けが俺。

ああ、馬鹿だ。馬鹿だ。

恋人のことを愛しながらも。

肉の欲求はこの男に傾いた。

心と体のそれぞれが求める欲の先を違えてしまったのだ。

その、どうしようもない。

『いけないこと』をしているこの感覚が。たまらない。とは。





最低な遊びを
しますか?

捲り上げられたスカートの下は何も穿いておらず。

気軽に今からどうですか？
と誘ってくる。

互いに名前は知らない。
まともに話したことさえない。

互いに単純に。
ただただ『欲』を満たすためだけ。

軽率がすぎる行為。
二人の間に『情』はなかった。

俺には恋人がいる。
愛しい人。

しかし、今、抱きたいのは目の前の男。

これは裏切りだ。

心は恋人にという言い訳をするつもりはない。それはただの事実だからだ。

ただ、この『裏切り』。ひどく昂る。



準備できて
いますよ？

私 ああ
いつでも

ぐいっ

見せつけるように突き出した腰。
よく見れば蕾には器具が詰まっていた。

男同士の性行為は準備に時間がかかる。
と聞いたことがあった。

つまみを引いて、そこに欲を突きたてろ。
と判りやすく伝えてくる。

この数日、何人にも抱かれるこの男を見て
いた。

この穴に何人の肉棒を啜えさせたのだら
うか。

どうでもいいことを考えながら俺はその
誘いにのる。

蜘蛛の巣にひっかかった蛾はこんな気分
なのだろうか？



あ
――

はあっ

あ……っ



ほう。と一息つく男。

その眼は欲に塗れ、こちらを期待している
とありありと見せつける。

俺は一瞬だけ悩んで、その服に手をかけた。
彼は何も言わない。

ならば。と服を脱がした。
特に理由も何もない。

彼の両手を肩に置かせ、片足を持ち上げる。
アナルにペニスを割り込ませる。

熱い肉に包まれ、ほどよくきついソコは、
気持ちがいい。

もう片足も持ち上げ、宙ぶらりんになった。
彼は、何か昔を見る目をして。

全部脱がしたのは、貴方が二人目ですよ。

と愉快そうに言った。



ん

あっ
あ

あ
はあ
あ

ぐ
ぐ

ぐ
ぐ

ぱ
ちゅ

ぱ
ちゅ



はあ
ああ
ああ

うっ!

あああ!

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ





んはぁ・あっ!

はぁあ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ



はあ

あ...っ

はちゅ

はちゅ



はぁあ!

あぁ...っ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

彼の背後。
本棚の陰に隠れるように、誰かがいた。

男だろう。びくり、と身体を固くし。そこに立ち尽くしている。

見てはいけないと思いつつも、目を逸らせない。

彼は後ろの男の存在に気が付いた。

それを気にしない。構わないのだろう。

彼にとっては単に遊びの相手が増えるだけ。

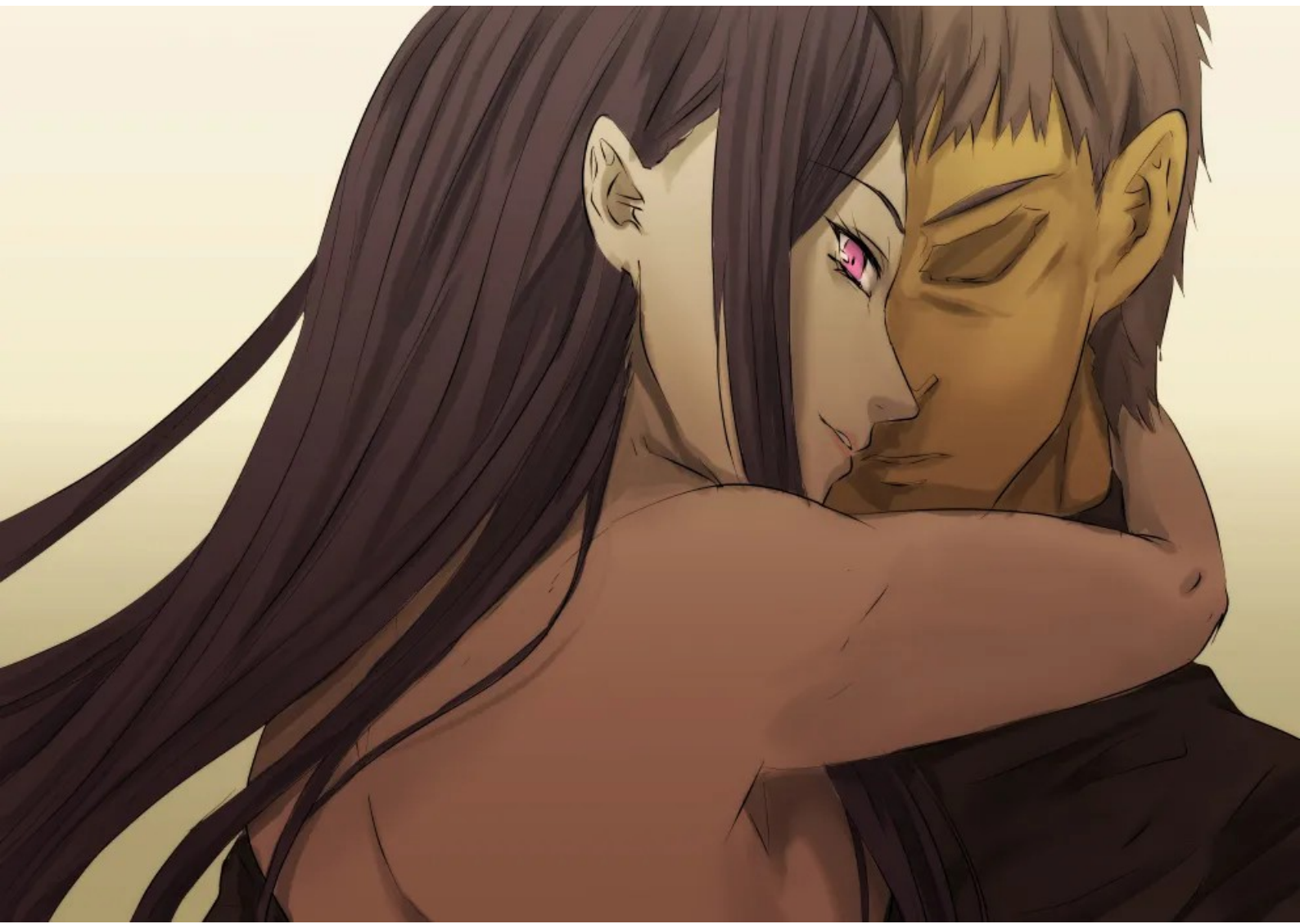
ああ、そうか。

俺もあんな感じだったのだろう。

数日前の俺を見ているのだ。俺は。

欲を煽られ、あそこの男も自ら罠に嵌っていくのだろう。

きっと近く、あの男は今の俺になるのだ。



終わり。





貸し出し期限
厳守!!!





貸し出し期限
厳守!!!









































































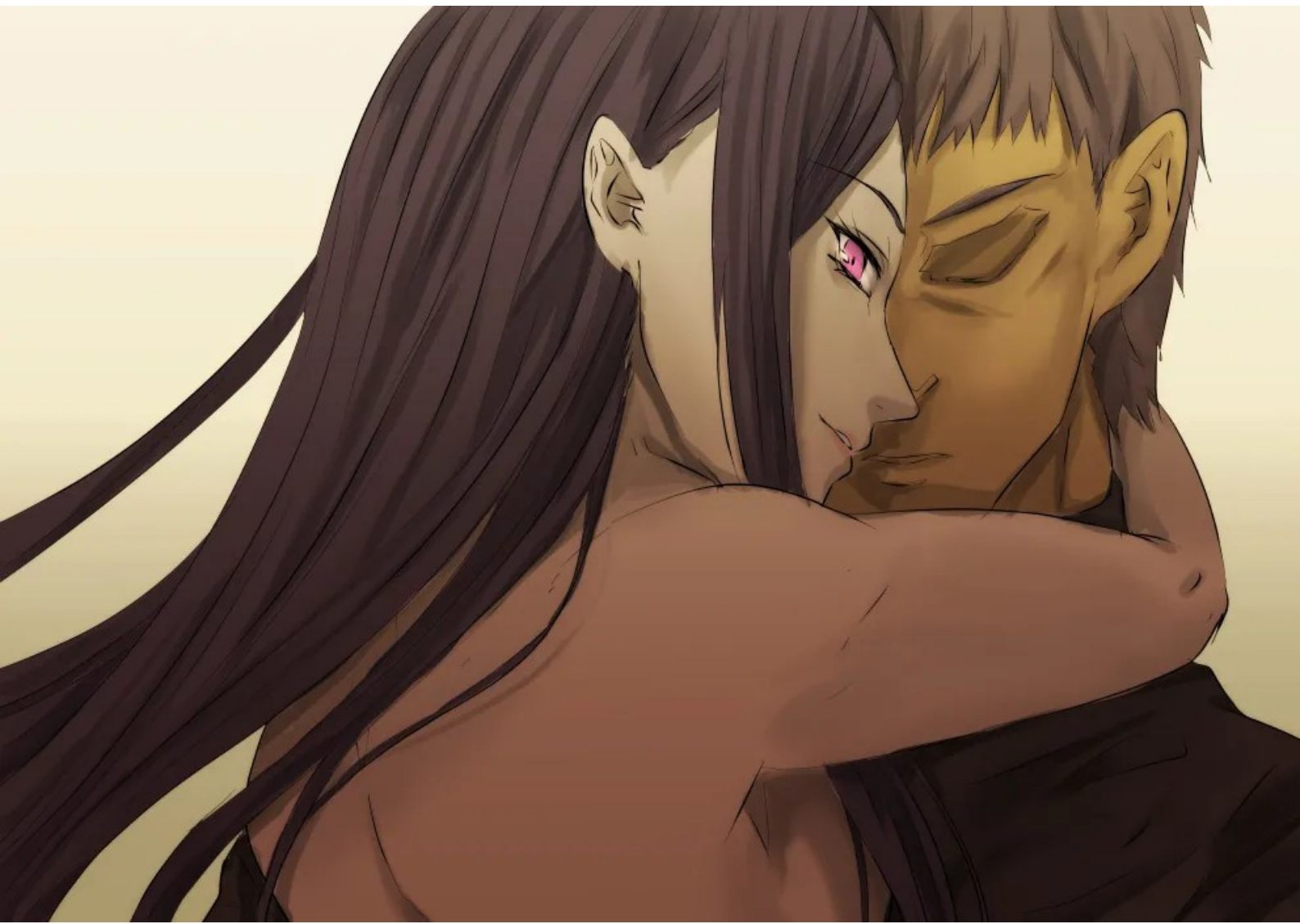














登場人物

お買い上げありがとうございます。
今回の男の娘は図書館の淫乱な「彼」。
テキスト多めでお送りしました。
この物語の終わったあと、主人公は恋人と
結婚をし、隠れて「彼」を抱きに図書館に行き。
「彼」の痴態を思い出しながら妻を抱く。
最低な性癖持ちの旦那になりますでしょう。

主人公 一人称「俺」 恋人を愛している。

恋人 主人公の恋人。いい人。

図書館の彼 図書館の不思議な常連。詳細不明。

作・ya-ma.